

## 心理臨床家の志望動機尺度作成の試み<sup>1)</sup>

上野まどか\*・金沢吉展\*\*

### The Development of Clinical Psychologist's Career Motivations Scale

Madoka UENO\* and Yoshinobu KANAZAWA\*\*

The purpose of this study was to develop The Clinical Psychologist's Career Motivations Scale. Scale items were developed based on the relevant literature. The scale consists of two subscales: Clinical Psychologist's Career Motivations (Internal) Scale and Clinical Psychologist's Career Motivations (Experiences) Scale. The scale was distributed to a random sample of 750 members of the Association of Japanese Clinical Psychology and 16 graduate students in clinical psychology. 297 (38.77%) usable responses were obtained. Factor analyses of Clinical Psychologist's Career Motivations (Internal) Scale yielded 4 factors that included "Self-usefulness derived from involvement with others", "Desire for self-growth and change", "Attaining social reputation through professional activities" and "Intellectual interest in the mind". Clinical Psychologist's Career Motivations (Experiences) Scale yielded 3 factors that included "Uncontrollable experiences", "Positive relationships with others" and "Emotionally distressing experiences". Factor-derived scale scores produced adequate internal consistency. Examining the relationships between career motivations and clinical practice further will be useful for training of clinical psychologists and clinical practice.

**key words:** career motivation, clinical psychologist, factor analysis, internal motivation, experiences

#### 問題と目的

本邦では、財団法人日本臨床心理士資格認定協会によって160校が臨床心理士養成のための大学院として認定を受け、5校の専門職大学院が開設されている(平成22年7月1日時点)。多くの学生が心理臨床家を志望する中、臨床心理士資格取得者も19,830名と急増している(平成21年4月30日時点)。しかし、実証的なデータに基づいて心理臨床家

の専門性を説明しようとする研究は少ない。そのような中、心理療法の効果研究では、技法といった援助の方法論よりも心理臨床家側の要因が重要であることが明らかになっている(Beutler, Machado, & Neufeldt, 1994; Lambert & Bergin, 1994; Lambert & Cattani-Thompson, 1996; Nelson & Neufeldt, 1996)。心理臨床家側の要因の中でも、心理臨床家の子ども時代や成人期以降の経験(Rønnestad & Skovholt, 2001)・ライフイベントやストレス

\* 明治学院大学大学院心理学研究科  
Graduate School of Psychology, Meiji Gakuin University, 1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan  
08psd002@mail1.meijigakuin.ac.jp

\*\* 明治学院大学心理学部  
Department of Psychology, Meiji Gakuin University, 1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan

<sup>1)</sup> ご多忙の中、調査にご協力頂きました日本心理臨床学会会員の皆様と大学院生の皆様に厚く御礼申し上げます。また、尺度作成にあたり多くのご助言をして下さいました方々に深く感謝いたします。

(Guy, Poelstra, & Stark, 1989; Sherman & Thelen, 1998)・出産, 育児(山口, 2008)といった個人的な要因が, 臨床家としての態度や役割・理論的志向性・治療スタイル・困難・対処方法・同僚との関係・精神的健康などの臨床実践に影響を及ぼすことが示されている。堀越・堀越(2002)も“特定の心理療法の理論の理解やその技術の獲得という後天的な面ばかりではなく, 相手の気持ちを表現しやすい場としての安全な関係作りなど, 援助者に本質的に備わっている素質や能力から生まれる部分も重要”(p. 426)であり, 対人援助職の選択に関わる要素の種類によっては臨床実践に機能的・肯定的な, もしくは非機能的・否定的な影響があると論じている。このように心理臨床家側には様々な内面的な要因が挙げられる中で, 心理臨床家の本質的な部分である志望動機と臨床実践は関係が深いことが以前より指摘されている。

Zaro, Barach, Nedelman, & Dreiblatt (1977/2005)は, 志望者が当初抱いていた動機や期待が, その後の臨床実践において経験する困難や個人的苦悩とかなり関連しており, 動機を検討することの重要性を述べている。Corey & Corey (1998/2004)も, 動機や欲求は, 援助者と“クライアントの双方にとって役立つものもあれば, 逆に妨害となることもあり”(p. 13), クライアントを理解する上でも“援助者が自分自身の欲求や動機を意識できていることがいかに大切か”(p. 150)を示唆する。また, Barnett, Baker, Elman, & Schoener (2007)は動機に関わる過去の経験や傷つきやすさ, 世話役割などの個人の性質や傾向が, サイコロジスト自身を悩ませたり, 自分の関心や問題, バーンアウトの兆候に目を向けることを疎かにさせ, インペアメント(職業的に適切な臨床実践を行えないようになる状態)の危険性につながると指摘する。このように, 心理臨床家の動機は, 臨床実践における困難やクライアント理解, 及び臨床家自身の精神的健康に影響を及ぼす可能性があるとは指摘されている。心理臨床家の教育・養成の立場においては, 動機についての研究が, 訓練生特有の逆転移の問題を理解するための公式を見いだすのに役に立つ(Racusin, Abramowitz & Winter, 1981)と期待されている。

心理臨床家の志望動機について, Merodoulaki (1994)が行った研究によれば, コンピューター科学

者との比較から, カウンセラーが家族の分離や学校生活で困難を感じていたことや, 家族の中で仲裁や情緒的なサポートの役割を担っていたことが有意に示されている。そして, カウンセラーの子ども時代は, 苦悩の時として思い出され「繊細」な子どもであった可能性が考察されている。Elliott & Guy (1993)は, メンタルヘルス関連の職業でない専門家と比較して, 女性のメンタルヘルスの専門家が有意に心理的困難や外傷体験, 源家族の中での葛藤を持ち, 心理療法を受けた人が多く, それに費やす時間も長かったことを報告している。Sussman (1992)はサイコセラピストになる動機について無意識的な側面から精神力動的に検討し, 臨床家自身の情緒的問題の解決を動機の主要因として挙げている。

本邦では, カウンセラー志望者に有意にいじめられた体験(渡部・東海林・椿堂, 2001)や, 内的葛藤体験(塩尻・福田, 2005)が多いと明らかにされている。

このように, 心理臨床家の志望動機に関する研究は, そのほとんどが原家族や学校で経験する葛藤や心理的苦悩の経験, および早期から世話役割を担っていたことが, 無意識的意識的に臨床家を志望する動機に影響していることを示しており, 否定的な感情体験を伴う動機が多いことがわかる。

しかし, 塩尻・福田(2005)は一概に苦悩の経験が心理臨床家の志望動機になっているとはいえないとしており, より詳細な検討が必要である。否定的な感情を伴う動機以外の動機にも着目した研究がある。Murphy & Halgin (1995)は, 職務経験平均18.5年(平均4~44年)の臨床サイコロジスト56名(男性30名, 女性24名, 不明2名)と社会心理学者53名(男性25名, 女性25名, 不明3名)を対象にして, Influence on Becoming Therapist 尺度(以下, IBTと略す)を作成した。協力者が少ない点で課題は残されているが, 動機を調べる初めての尺度が開発された。

因子分析の結果, キャリア選択のための動機に関する4つの因子(a. 職業的な愛他主義, b. 職業的達成や出世の機会, c. 自己の成長と人への好奇心, d. 個人的問題の解決)と, 影響した過去経験に関する3つの因子(e. 個人的問題の経験, f. 家族で困難を感じた経験, g. とても親密な対人関係を持った経験)を得ており, a, b, c, gのような新たな動機を見

いだしている。IBT を用いた社会心理学者との比較から、b, d, e, f, の 4 因子得点が有意に高く、1. 原家族内やそれ以外でも心理的苦悩を経験したこと、2. 個人的な問題を解決したいこと、および 3. 職業的業績と専門的成就のための機会の追求がサイコセラピストのキャリア選択に影響していたと報告している。また、従来の先行研究では、研究者側が志望動機についての仮説を既に持ち、仮説に基づいて項目や尺度を決定していたために探索的検討が行われてこなかった。探索的に検討するため、上野(2010)は面接調査を行った。結果対象になった大学院生が、過去の上手くいかなかった経験や、模範となる他者がいた経験、良好な人間関係を築いた経験、役立ち体験などの過去経験と、自己理解への欲求や対人希求、権威への憧れ、「人」への興味、自身の資質を認識したこと、貢献したいと思ったことなどの内発的な動機を有していることがわかった。さらに個人が、複数の動機を有し、否定的感情と肯定的感情の両方を伴う様々な動機があることを明らかにした。

ほかに上記に挙げられた動機以外にも、援助職に就く親を持った人は、代理学習の効果により援助職に従事しやすく、十分な援助が受けられない人々(低所得者など)を強く援助したいと思っていること(Krouse & Nauta, 2005)や、消極的理由による志望者がいることもわかっている(金沢・岩壁, 2007)。

なお、Murphy & Halgin (1995) と上野(2010)は、志望動機を過去経験と内的過程に分けている点で共通している。両者は質の異なる変数であり、例えば二人の心理臨床家が、同じ過去経験を有していたとしても志望するに至るまでの個人の内的過程は異なる可能性があるだろう。ある過去経験がどのような内的過程をたどり志望動機へと結びつくのかを検討したり、どちらの変数が臨床実践と強い関連を示すのかを検討するためにも、それぞれの変数を区別しておく必要がある。

したがって、本研究では、先行研究から心理臨床家の志望動機に関して広く項目収集を行い、内的要因と過去経験の 2 つに分けて心理臨床家志望動機尺度を作成することを目的とする。尺度を作成することは、心理臨床家の志望動機への理解を促進し、動機の種類による臨床実践やクライアントへの影響を探究するための測度として役に立つであろう。そ

れらが明確になることで、臨床実践やクライアントへの否定的影響を予防したり効果的影響を促進するために、心理臨床家の訓練や研修、スーパーヴィジョンでの留意すべき事柄について示唆を得ることができる。長期的に見れば、そのような訓練や研修内容の改善と充実により質の高い心理臨床家の育成の一助になると思われる。なお、先行研究では「counselor」「psychotherapist」「カウンセラー」「心理臨床家」などの様々な用語が用いられているが、本論文では総称して「心理臨床家」とする。

## 方 法

### 調査内容

質問紙による調査を実施した。用いた尺度は以下のとおりである。なお、調査時には②と③も併せて配布したが、本論文では心理臨床家志望動機尺度の作成について論じるため①と④のみ検討する。

#### ①心理臨床家志望動機尺度

Murphy & Halgin (1995) の研究を基盤として Corey & Corey (1998, 2004), Elliott & Guy (1993), 堀越・堀越(2002), 金沢・岩壁(2007), 塩尻・福田(2005), 上野(2010)の先行研究や文献を参考に質問項目を作成した。その際、Murphy & Halgin (1995) の因子分析結果と上野(2010)の分類にならい、職業選択に関係した内的要因と過去経験の 2 つに分けて、それぞれ志望動機(内的要因)尺度 46 項目と、志望動機(過去経験)尺度 31 項目を作成した。また、前者の気持ちや思いを尋ねる項目と、後者の経験を尋ねる項目は質が異なるため、2 つに分けて尋ねることで答えやすくなると思われる。両尺度とも、教示は「あなたが心理臨床家を志し始めた当時の気持ちや思いに関係していることは、どのようなことですか?」とした。

回答は Murphy & Halgin (1995) にならい「全く当てはまらない」(1点)「当てはまらない」(2点)「当てはまる」(3点)「とても当てはまる」(4点)の 4 件法で求めた。臨床心理士 1 名、臨床心理士資格を有する心理学部の教員 1 名、および臨床心理士指定大学院在学中の大学院生 3 名と内容的妥当性ならびに表面的妥当性を検討のうえ作成した。

#### ②日本版カウンセリング自己効力感尺度 37 項目

カウンセリングを行う自己効力感を測定した Larson, Suzuki, Gillespie, Potenza, Bechtel, &

Toulouse (1992) の The Counseling Self-Estimate Inventory を臨床心理士資格を有する心理学部の教員 2 名と筆者で日本の心理臨床で用いる表現に和訳・改変した。回答は Larson et al. (1992) にならい 6 件法で求めた。なお、②は本論文の分析対象でないため論じない。

③一般性自己効力感尺度 16 項目 (坂野・東條, 1986)

日本版カウンセリング自己効力感尺度の妥当性検討のために使用し、2 件法で回答を求めた。なお、③は本論文の分析対象でないため論じない。

④デモグラフィック変数

金沢・岩壁 (2007) を参考に、性別・年齢・臨床活動経験年数・心理面接経験年数・スーパーヴィジョンを受けた経験年数・主な職域・資格 (複数回答可)・主な理論的志向性・最終学歴を尋ねた。臨床心理士 1 名、臨床心理士資格を有する心理学部の教員 1 名、および臨床心理士指定大学院在学中の大学院生 3 名とともに検討し項目を定めた。

**調査協力者**

「日本心理臨床学会会員名簿 2006 年度版」の中から無作為で 750 名に質問紙を郵送した。質問紙の他に依頼文、謝礼の粗品、返信用封筒を同封した。加えて、心理臨床家を志す時期は思春期・青年期が多い (金沢・岩壁, 2007) ことから、その時期により近いサンプルも含めるため数カ月後には臨床現場に就業予定の臨床心理士指定大学院 2 年生 (1 校) の 16 名に縁故法で配布し、いずれも郵送にて回収した。転居不明などで 89 通が返送された。301 通が回収され、うち有効回答は 297 通だった (有効回答率 38.77%)。内訳は女性 191・男性 105・不明 1 名、平均年齢 45.42 歳 ( $SD=13.08$ , 範囲 24~81), 平均心理臨床経験 15.66 年 ( $SD=11.77$ , 範囲 1~55), 平均心理面接経験 13.99 年 ( $SD=11.31$ , 範囲 0~55), スーパーヴィジョンを受けた平均経験 5.92 年 ( $SD=6.45$ , 範囲 0~40) だった。主な職域は順に、教育 108 名、医療・保健 66 名、福祉 40 名、大学・研究所 34 名、労働・産業 10 名、司法・矯正・警察 10 名、私設心理相談 6 名、その他 18 名、不明 5 名だった。主な理論的志向性は順に、折衷主義/統合主義 97 名、精神分析理論 62 名、特に志向する理論はない者 42 名、人間性心理学 29 名、分析理論 23 名、認知行動理論 16 名、システム理論

13 名、行動理論 2 名、アドラー理論 1 名、認知理論 1 名、その他 7 名、不明 4 名だった。有する資格は順に臨床心理士 248 名、教員 51 名、その他 17 名などだった。最終学歴は高校 1 名、学士 89 名、修士 186 名、博士 21 名だった。

**調査時期**

配布時期は 2009 年 1 月下旬~3 月上旬、回収時期は 2009 年 2 月中旬~3 月下旬だった。

## 結 果

(1) 心理臨床家志望動機 (内的要因) 尺度 (Table 1)

因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行い、固有値の減衰状況および解釈可能性から 4 因子解を採択した。G-P 分析および I-T 相関で有意な相関がない項目、および負荷量 .350 以下の 5 項目を削除し残る 41 項目で再度分析を行った。

第 1 因子は他者を援助・理解し関わることで、役立ちたい・必要とされたい・感謝されたい・やりがいを感じたいなど、自分自身の有用感を得る動機で構成されていることから〈他者との関わりから得られる自己有用感 (16 項目,  $\alpha=.908$ )〉と命名した。第 2 因子は自分の問題を解決したり自己理解をする等の自己の変化・成長を望む動機で構成され、〈自己の変化・成長への欲求 (10 項目,  $\alpha=.858$ )〉と命名した。第 3 因子は、専門活動を行ったり地位を得ることで社会からのよい評価を期待する動機や、経済的安定を求めた動機であり〈専門活動による社会的評価の獲得 (11 項目,  $\alpha=.839$ )〉と命名した。第 4 因子は対人関係や心に関する知的関心であり〈心への知的関心 (4 項目,  $\alpha=.617$ )〉と命名した。

(2) 心理臨床家志望動機 (過去経験) 尺度 (Table 2)

因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行い、固有値の減衰状況および解釈可能性から 3 因子解を採択した。負荷量 .350 以下および多重因子に負荷していた 7 項目を削除し残る 24 項目で再度分析を行った。

第 1 因子は「身体的病気」「身体的・心理的暴力」「虐待・ネグレクト」「死去」「別離」「(他者が) 依存的」といった外的な事象で、状況を変えたり避けたりすることが困難な体験から構成されており〈コントロール困難な体験 (9 項目,  $\alpha=.810$ )〉と命名した。第 2 因子は肯定的な対人関係を築いた経験や、

Table 1 心理臨床家志望動機（内的要因）尺度

	1	2	3	4	共通性
<b>1. &lt;他者との関わりから得られる自己有用感 16項目 <math>\alpha=.908</math> <math>M=2.39</math> <math>SD=.59</math>&gt;</b>					
9. 人の役に立ちたいと思った	.788	-.141	-.163	.066	.672
31. クライエントの成長を促進したかった	.787	-.019	-.078	.049	.629
32. 社会に貢献したかった	.764	-.194	.014	.059	.625
27. 他者からの期待に応えたいと思った	.729	-.004	.035	-.144	.553
43. クライエントを理解したかった	.716	-.024	-.219	.206	.603
19. 誰かに必要とされたいと感じた	.693	.090	-.003	-.119	.502
45. 感謝されたいと感じた	.663	.157	.018	-.214	.510
15. 他者の成長を促進したかった	.647	-.066	.029	.050	.427
40. 他者が悩む問題に対して答えを与えたかった	.646	.096	.004	-.190	.463
42. 他者に影響を与えたかった	.598	.187	.083	-.124	.415
46. クライエントと近い関係を築きたかった	.529	.218	-.062	-.116	.345
24. やりがいを感じたかった	.499	.007	.108	.167	.289
39. 他者を理解したかった	.487	.166	-.201	.320	.408
22. 自分の特性や経験を活かしたいと思った	.447	-.050	.127	.130	.235
35. 自分の援助技術を上げたいと考えた	.437	-.038	.235	.238	.304
12. 人と関わるのが好きだった	.387	-.185	.047	.238	.243
<b>2. &lt;自己の変化・成長への欲求 10項目 <math>\alpha=.858</math> <math>M=1.99</math> <math>SD=.56</math>&gt;</b>					
36. 自分自身も救われたかった	-.073	.817	.030	-.012	.674
37. 自分の問題やコンプレックスを解決・緩和したいと思った	-.085	.805	-.057	.093	.667
28. 自分自身が孤独感やさみしさを感じていた	-.022	.723	-.142	-.078	.550
4. 自分自身を理解したかった	-.326	.720	-.016	.422	.804
29. 身近な人や社会に対する反発を感じていた	-.084	.523	.105	-.086	.299
23. 自分の感情を上手く表現できるようになりたかった	.184	.513	-.031	.161	.323
8. 人とうまく関われるようになりたかった	.140	.475	.012	.220	.294
10. 他者と近い関係を築きたかった	.299	.455	.042	.094	.306
41. 自分自身が成長したかった	.175	.412	-.065	.264	.274
30. 人々の生活のプライベートな面を知りたかった	.128	.405	.318	-.085	.289
<b>3. &lt;専門的活動による社会的評価の獲得 11項目 <math>\alpha=.839</math> <math>M=1.82</math> <math>SD=.52</math>&gt;</b>					
7. 経済的安定を得たいと思った	-.196	-.089	.727	.097	.584
6. 格好良さに憧れた	-.088	.065	.663	.036	.453
5. 専門家として認められたかった	.036	-.041	.644	.250	.480
38. 地位や名声を得たかった	-.009	.152	.591	-.195	.411
16. 知的な挑戦をしたと感じた	.101	-.043	.549	.140	.333
14. 生活のためだと考えた	-.136	-.079	.536	-.036	.313
33. 優越感を感じたかった	.061	.238	.524	-.282	.414
26. 多様な専門的活動を行いたかった	.242	-.169	.459	.171	.327
44. 業績を上げたかった	.267	.101	.448	-.143	.303
17. 他職種と一緒に働きたいと思った	.151	-.042	.444	.114	.235
3. 心理職が必要とされていると感じた	.307	-.174	.380	.153	.292
<b>4. &lt;心への知的関心 4項目 <math>\alpha=.644</math> <math>M=3.26</math> <math>SD=.53</math>&gt;</b>					
2. 対人関係について学びたかった	-.020	.231	.112	.570	.391
13. 心理学に対する興味や関心があった	-.029	-.094	.122	.479	.254
1. 人間の心に興味や関心があった	-.031	.192	-.060	.445	.239
21. 心理療法や心理テストに興味や関心があった	.183	.026	.029	.391	.188
因子間相関					
	1	2	3	4	
		.444	.609	.225	
			.315	.109	
				-.042	

Table 2 心理臨床家志望動機 (過去経験) 尺度

	1	2	3	共通性
<b>1. &lt;コントロール困難な体験 9項目 <math>\alpha=.810</math> <math>M=1.42</math> <math>SD=.45</math>&gt;</b>				
24. 家族以外の身近な人が身体的病気を患っていたこと	.864	-.016	-.123	.762
23. 家族以外の身近な人から身体的・心理的暴力を受けた経験	.770	-.095	-.050	.604
31. 家族から虐待, ネグレクトを受けた経験	.597	-.099	.036	.367
18. 家族が身体的病気を患っていたこと	.503	.048	-.001	.255
15. 家族以外の身近な人の死去, もしくは別離の経験	.502	.140	.092	.280
28. 家族の死去, もしくは別離の経験	.474	.039	.050	.229
9. 家族以外の身近な人が自分に対して依存的だったこと	.465	.221	.119	.279
22. 自分が身体的病気を患った経験	.446	-.010	.068	.203
27. 家族以外の身近な人の世話や面倒をみることに責任を感じていたこと	.360	.282	.068	.214
<b>2. &lt;肯定的な対人関係 8項目 <math>\alpha=.769</math> <math>M=2.20</math> <math>SD=.60</math>&gt;</b>				
19. 他者と良好な人間関係を築いたこと	-.195	.810	.012	.693
25. 家族と良好な人間関係を築いたこと	-.171	.705	.107	.538
21. 他者の役に立つ喜びを感じたこと	-.032	.664	.038	.443
17. 他者から対人援助の役割を与えられたこと	.090	.538	-.202	.338
11. 家族以外の身近な人が対人援助職に就いていたこと	.143	.450	-.169	.251
8. 模範となるような人がいたこと	.174	.403	-.011	.193
2. ボランティアや実習をした経験	.049	.395	.082	.165
3. 他者から心理職の仕事を勧められたこと	.202	.353	-.120	.180
<b>3. &lt;情緒的苦悩の体験 7項目 <math>\alpha=.843</math> <math>M=2.17</math> <math>SD=.63</math>&gt;</b>				
5. 自分の情緒的問題や精神的脆さを感じた経験	-.018	-.156	.816	.690
10. 自分自身が悩んだ経験	-.041	-.088	.815	.674
26. 人間関係がうまくいかなかった経験	-.095	.068	.672	.465
4. 他者から受容されなかった経験	.105	.027	.559	.325
6. 家族以外の身近な人が情緒的問題を抱えていたこと	.226	.150	.420	.250
16. 子どもの頃, 幸福感を感じる事が少なかったこと	.290	-.201	.404	.288
1. 人に相談をした経験	.023	.310	.392	.250
	因子間相関	2	3	
	1	.401	.435	
	2		.282	

援助役割を見習ったり勧められたりし肯定的な対人関係が基になった体験で構成されているため〈肯定的な対人関係 (8項目,  $\alpha=.769$ )〉と命名した。第3因子は自分自身が悩んだり脆弱性を感じた経験で構成され, いずれも情緒的な苦悩を伴うものであるので〈情緒的苦悩の体験 (7項目,  $\alpha=.843$ )〉と命名した。

両尺度に対し I-T 相関および G-P 分析を行った結果, 各項目との有意な相関や上位群と下位群の得点間における有意差が全項目において認められた。

### 考 察

本研究の目的は, 心理臨床家の志望動機を知るための心理臨床家志望動機尺度を作成することであった。尺度の項目作成に際しては, 先行研究で挙げられた様々な動機の内容を盛り込んだ尺度を作成する

ことに留意した。

心理臨床家志望動機 (内的要因) 尺度は, 〈他者との関わりから得られる自己有用感〉〈自己の変化・成長への欲求〉〈専門活動による社会的評価の獲得〉〈心への知的関心〉の4つの因子から構成された。 $\alpha$ 係数は.908~.644とおおむね十分な内的一貫性を有していることが明らかになった。

下位尺度の項目内容は先行研究や文献で指摘されていたことを統括する形で一致していた。Murphy & Halgin (1995) の IBT を基本に, 足りない項目を含め尺度を作成したため, 本尺度と IBT は類似しているが, IBT よりも多くの志望動機を含む尺度となった。各因子の構成は IBT と比べて多少の相違があり, 下記, その点について触れながら考察したい。

まず, 志望動機 (内的要因) 尺度についてである。

第1因子である〈他者との関わりから得られる自己有用感〉は、IBTの「a. 職業的な愛他主義」因子の内容と類似していた。IBTと同様に他者と社会に対する援助といった愛他的要素も含まれているが、それだけでなく、自分自身も必要とされたり感謝されたり、期待に応えることを望む項目が含まれていた点がIBTと異なっている。本調査の協力者にとって、他者を理解・援助し関わることで、自分自身が有用感を得る動機は、関連が深いと考えられる。他者とのそのような関わりによって自己有用感は満たされるのか、そして臨床実践を継続する動機にもそのような自己有用感があるのか等、動機の持続や変化のプロセスについても検討していく必要がある。

次に、第2因子の〈自己の変化・成長への欲求〉についてである。IBTの「d. 個人的問題の解決」因子を構成した個人的問題の解決を望む動機（項目36, 37, 28）と、IBTの「c. 自己の成長と人への好奇心」因子を構成した自己の成長を望む動機（項目4, 41, 8, 10）が、本調査において1つの因子を構成した。本調査の協力者は、個人的問題の解決と自己の成長はどちらも変化・成長に関わる近い概念として捉えていることがわかる。ただし、Elliot & Guy (1993)は、個人的な葛藤を解決したり“傷を癒す”といった動機がある場合、クライアントに行う援助の効果は減少する可能性があるとして述べており、実践との関連について吟味することが大切である。一方、心理臨床家の個人的経験は職業的発達に影響する (Skovholt & Rønnestad, 1995) ことから、心理臨床家の自分自身の変化・成長を望む側面が、心理臨床家としての職業的発達を促進することも考えられ、今後検討していきたい。

第3因子〈専門的活動による社会的評価の獲得〉因子は、上昇志向の高さを表す点でIBTの「b. 職業的達成や出世の機会」因子と一致していた。異なるのは、「b. 職業的達成や出世の機会」因子は地位や職業的達成、出世を望む項目で構成されていたが、〈専門活動による社会的評価の獲得〉因子では、「格好良さ」「優越感」「地位や名声」といった対外的評価を望む項目と、現在の本邦の心理職の現状では満たすのが難しい「経済的安定を得たい」「生活のため」といった経済的安定を求める動機も含まれていた点である。米国では、州単位で心理学の専門活動に関する法律が制定されており、サイコロジストと

しての立場は確立されている。しかし、本邦では臨床心理士は認定資格となっており、法的な国家資格ではない上、常勤職が少ない (村瀬, 1995)。ゆえに、本邦の心理職は欧米と比較して地位も確立されておらず安定した職業とはいえない。それにもかかわらず、対外的評価や経済的安定を望む項目が構成されたのは、心理臨床家を志す時期は思春期・青年期が多く (金沢・岩壁, 2007)、マスメディアの影響があったことや心理職の現状について知らないままに職業選択を行ったためではないかと考えられる。また、対外的評価を望む項目については、特に他者評価への懸念や他者からの被規定性といった周りの意見や反応を気にして自己評価を行う日本人の自己の特性 (高田・松本, 1995) が反映されたのではないだろうか。臨床実践を行う上では、「地位や名声」「優越感」「経済的安定」への期待は満たされることが困難であり、それらを求め続けることは効果的な臨床実践の妨げになる可能性がある。臨床実践を継続するにあたって元来の動機を変更せざるをえなくなると考えられ、それらの動機がどのように変化していくのかについて検討することは興味深い。

第4因子の〈心への知的関心〉は、IBTの「c. 自己の成長と人への好奇心」因子と内容が似ているものの、自己成長を望む項目は含まれておらず、対人関係や心に関する知的関心で構成されていた。また、他の因子との相関も低い。第4因子は知的作業を伴う動機であり、他とはタイプの異なる動機であると考えられる。

本調査では、「なんとなくなくなろうと思った」「他にできる仕事なかった」「自分の意思で選んだのではなかった」の消極的理由に関する項目が削除された。他の項目とは質の異なる内容であったことと、多くの者は積極的な理由で心理臨床家を志望したためだと考えられる。しかし、金沢・岩壁 (2007) の自由記述による調査では、少人数が志望動機として“消極的理由”を挙げており、消極的理由で志した場合、どのような臨床実践継続動機を持って実践を行っているのかについても興味深い。

次に、心理臨床家志望動機 (過去経験) 尺度は、〈コントロール困難な体験〉〈肯定的な対人関係〉〈情緒的苦悩の体験〉の3つの因子から構成された。 $\alpha$  係数は .769~.843 と十分な内的一貫性を有していた。

IBT の過去経験に関する因子 (e. 個人的問題の経験, f. 家族で困難を感じた経験, g. とても親密な対人関係を持った経験) と大きく異なる点は因子構造であった。IBT では、自分自身が経験したことと、家族との関係において経験したことが、それぞれ別の因子を構成していた。本研究では、家族以外の身近な他者との関係で生じた事柄についても項目に含めているが、IBT と類似した因子構造になるのであれば、個人が経験したこと、家族および身近な他者との関係で経験したことは別の因子を構成すると思われた。しかし、それらに関する項目は同一因子に混在し、IBT と異なる因子構造を示した。本研究の対象者と Murphy & Halgin (1995) の対象者が、個人と、家族および身近な他者のつながりについて異なる考え方をしていると考えられる。

各因子構造について、まず第 1 因子の〈コントロール困難な体験〉は、外的な事象で避けたり状況を簡単には変えることが難しい体験から構成されており、無力感や喪失感・傷つき・重圧といった様々な精神的影響を及ぼしうる体験である。そのような体験をどのように乗り越えており、臨床実践においてどのような影響が及ぼされるのかを検討することが重要である。また、項目 9 と 27 のように他者に依存されたり、世話や面倒をみたりする動機づけがあることは対人援助において役立つ側面があるだろう。その反面、もしこれらの役割を長い間担っていた経緯があるとしたら、臨床場面においても確かな自覚をせずに他者援助の役割をとってしまいかねない (DiCaccavo, 2002)。その結果、自分自身の抱える困難や問題が見えなくなってしまい、バーンアウトの兆しを見逃したり否定したり過小評価してしまう可能性もあるといえよう (Barnett et al., 2007)。今後、心理臨床家の精神的健康および実践との関係から吟味することが大切である。

次に、第 2 因子〈肯定的な対人関係〉は、IBT の「g. とても親密な対人関係を持った経験」因子と類似していた。これまでの文献では、否定的動機が及ぼす臨床実践への影響に関する言及は見られるが、肯定的な対人関係の経験と臨床実践との関連についての研究は皆無である。飯田・村瀬 (2010) は、心理臨床家の資質に関わる要素として被愛の経験や畏敬の念を持った経験が大切であることを述べており、第 2 因子に示されたような経験がクライアントと

の関係構築の仕方や関係性などにどのように関連するのか、今後の検討が期待される。

第 3 因子〈情緒的苦悩の体験〉は情緒的苦悩を伴う経験に関するものであった。Racusin et al. (1981) が、第 3 因子に表されるような背景を持ったセラピストが、共感的もしくは効果的かどうかについて興味深い問いを投げかけている。

以上のように、臨床実践やクライアント、心理臨床家自身の精神的健康と関連があると考えられる心理臨床家志望動機尺度が作成された。心理臨床家を志望する動機について検討する際には、葛藤や心理的苦悩、個人的問題の解決や個人的欲求、および世話体験といった動機に加えて、専門的活動の意欲や他者援助への動機づけ、知的関心、肯定的な対人関係構築経験、援助役割体験などの肯定的体験や動機づけなども含め包括的に把握していく必要がある。そして、それらの動機を個々に見ていくのではなく、各動機同士の関連も検討しながら実践をとらえていくことが大切であると思われる。

本研究では、志望動機を内的要因と過去経験の 2 つに分けて尺度を作成しているため、志望動機を質の異なる 2 側面からとらえることができる。今後は、2 側面の相互影響関係を検討したり、クラスター分析によるタイプ分けなどを行うことで、心理臨床家の志望動機についてより深い理解が得られると期待できる。

#### 今後の課題と研究の発展

本研究は、本邦の心理臨床の代表的な学会を選びその中で無作為抽出を行ったが、学会員でなかったり他の学会に入会している心理臨床家が含まれていなかった。対象となった大学院も 1 校であり、より幅広くサンプルをとっていくことが望ましい。

また、金沢・岩壁 (2007) と上野 (2010) の質的調査では、心理臨床家志望者は複数の動機を有して心理臨床家を志すことが明らかであるが、本調査では多くの項目において平均値が低く「当てはまらない」「あまり当てはまらない」の回答をしている者が多かった。自分の言葉で自由に回答できる質的調査と異なり、質問紙法はあらかじめ項目として文章化されているため、表現のされ方に違和感を感じたか、まだ尺度に含まれていない動機があるのかもしれない。もしくは、上野 (2010) が、調査方法によって回答者の表出のレベルが異なると述べているよう

に、動機の意識的な側面と無意識的な側面のうち、今回実施した質問紙法では無意識的な側面の測定が難しいという限界点があったと思われる。今後は動機について多面的に聴取できるインタビューなどの質的調査法を合わせながら動機を検討していくことが必要である。性別や年齢、職業選択時の社会的文化的背景などの要因による動機の違いを検討したり、臨床実践継続動機や動機の変化の過程、および臨床実践で感じる困難や対処など、動機と臨床実践との関連を調査することが重要である。そして、動機について明らかにするとともに、心理臨床家や志望者が自分の動機に気づき、臨床実践との関連を知るためにはどのような教育を行うとよいのかについても検討し、心理臨床家の教育や研修内容の充実と臨床心理学的実践活動の質の向上について両面から吟味していくことが望まれる。

また、志望動機のみならず様々な個人的・職業的経験が臨床実践に影響を与えることが示されており(Rønnestad & Skovholt, 2001)、今後、臨床実践と関連する様々な経験や思いをより広く検討していくことが、臨床実践の質の向上に役立つだろう。

#### 引用文献

- Barnett, J. E., Baker, E. K., Elman, N. S., & Schoener, G. R. 2007 In pursuit of wellness: The self-care imperative. *Professional Psychology: Research and Practice*, **38**, 603-612.
- Beutler, L. E., Machado, P. P. P., & Neufeldt, S. A. 1994 Therapist variables. In Bergin, A. E., & Garfield, S. L. (Eds.) *Handbook of psychotherapy and behavior change*. 4th ed. Oxford, England: John Wiley & Sons, pp. 229-269.
- Corey, M., & Corey, G. 1998 *Becoming a helper*. 3rd ed. CA US: Thomson Brooks/Cole Publishing. (下山晴彦 監訳 堀越 勝・堀越あゆみ訳 2004 心理援助の専門職になるために—臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト 金剛出版)
- DiCaccavo, A. 2002 Investigating individuals' motivations to become counselling psychologists: The influence of early caretaking roles within the family. *Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, **75**, 463-472.
- Elliott, D. M., & Guy, J. D. 1993 Mental health professionals versus non-mental-health professionals: Childhood trauma and adult functioning. *Professional Psychology: Research and Practice*, **24**, 83-90.
- Guy, J. D., Poelstra, P. L., & Stark, M. J. 1989. Personal distress and therapeutic effectiveness: National survey of psychologists practicing psychotherapy. *Professional Psychology: Research and Practice*, **20**, 48-50.
- 堀越あゆみ・堀越 勝 2002 対人援助専門職の基礎にあるもの 精神療法 **28** 金剛出版 pp.425-432.
- 飯田昭人・村瀬嘉代子 2010 対人援助職者の資質と援助行為との関連に関する研究 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集, 272.
- 金沢吉展・岩壁 茂 2007 心理臨床家の職業的発達に関する調査から—(3) 臨床家を志す動機に関する質的分析 日本心理臨床学会第26回大会発表論文集, 217.
- Lambert, M. J., & Bergin, A. E. 1994 The effectiveness of psychotherapy. In Bergin, A. E., & Garfield, S. L. (Eds.): *Handbook of psychotherapy and behavior change*. 4th ed. Oxford, England: John Wiley & Sons, pp. 143-189.
- Lambert, M. J., & Cattani-Thompson, K. 1996 Current findings regarding the effectiveness of counseling: Implications for practice. *Journal of Counseling & Development*, **74**, 601-608.
- Larson, L. M., Suzuki, L. A., Gillespie, K. N., Potenza, M. T., Bechtel, M. A., & Toulouse, A. L. 1992 Development and validation of the Counseling Self-Estimate Inventory. *Journal of Counseling Psychology*, **39**, 105-120.
- Merodoulaki, G. M. 1994 Early experiences as factors influencing occupational choice in counseling and psychotherapy. *Counselling Psychology Review*, **9**, 18-39.
- 村瀬孝雄 1995 日本の臨床心理学：その躍進力と問題点 臨床心理士会報, **6**(2), 28-29.
- Murphy, R. & Halgin, R. 1995 Influences on the career choice of psychotherapists. *Professional Psychology: Research and Practice*, **26**, 422-426.
- Nelson, M. L., & Neufeldt, A. 1996 Building on an empirical foundation: Strategies to enhance good practice. *Journal of Counseling & Development*, **74**, 609-615.
- Racusin, G. R., Abramowitz, S. I., & Winter, W. D. 1981 Becoming a therapist: Family dynamics and career choice. *Professional Psychology*, **12**, 271-279.
- Rønnestad, M. H., & Skovholt, M. T. 2001 Learning arenas for professional development: Retrospective accounts of senior psychotherapists.

- Professional Psychology: Research and Practice*, **32**, 181-187.
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフエフィカシー尺度の試み 行動療法研究, **12**, 73-82.
- Sherman, M. D., & Thelen, M. 1998 Distress and professional impairment among psychologists in clinical practice. *Professional Psychology: Research and Practice*, **29**, 79-85.
- 塩尻智也・福田 廣 2005 カウンセラー志望者の志望動機について—自我同一性, 過去経験及び進路選択からの分析 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **19**, 103-109.
- Skovholt, M. T., & Rønnestad, M. H. 1995 *The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development*. Oxford, England: John Wiley & Sons.
- Sussman M. B. 1992 *A curious calling: Unconscious motivations for practicing psychotherapy*. MD US: Jason Aronson.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本的自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, **66**, 173-178.
- 上野まどか 2010 カウンセラーを志望する大学院生の動機と臨床実践で感じる困難との関係 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要, **15**, 9-26.
- 渡部瑞恵・東海林則子・椿堂由紀 2001 カウンセラーを志望する大学生のパーソナリティ特性の検討—援助規範意識との関連から 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, **6**, 15-23.
- 山口慶子 2008 女性臨床心理士の複数役割の体験とその葛藤について—スピルオーバーの視点から—お茶の水女子大学人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻発達人間科学系発達臨床心理学コース修士(社会科学)論文
- Zaro, J. S., Barach, R., Nedelman, D. J., & Dreibratt, I. S. 1977 *A guide for beginning psychotherapists*. Oxford England: Cambridge Univ. Press. (森野礼一・倉光 修(訳) 2005 心理療法入門—初心者のためのガイド 誠信書房)

(受稿: 2010.5.19; 受理: 2011.5.18)